

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

【実践者】

氏名	南沢青和	学校名	長野県 千曲市立屋代小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	5 年 松組（ 2 6 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025 年 11 月（ 2 時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域： 道徳		
2. 単元名と単元目標 単元名：「つながりをつなぐ」— JICA 海外協力隊員の活動から“支援”のかたちを考える— 単元目標：世界で行われているさまざまな支援の姿を通して、「支援」とは一時的な行為にとどまらず、相手の将来や地域の発展につながるものであることに気づく。その考えを、自分たちの身近な生活や学級・学校での関わりに重ねて考えることで、支援を自分ごととして捉え、相手の立場に立って考えようとする態度を育てる。 関連する学習指導要領上の目標： B（7）思いやり・共感 ・協力隊員の活動や困っている人々の立場を通して、他者への思いやりや共感の心を育てる。		
3. 単元の評価 規準	①知識・技能	協力隊員の活動を通して、支援には「今すぐできる支援」と「未来につながる支援」など、さまざまな形があることを理解している。
	②思考・判断・表現	協力隊員の活動や身近な生活場面を基に、「今すぐできる支援」「未来につながる支援」の違いについて、相手の立場に立って考え、自分の考えを話し合いや記述を通して表現している。
	③主体的に学習に取り組む態度	話し合いやワークシートの活動を通して、相手の立場に立ちながら、今だけでなくこれからにつながる、相手にとって本当に力になる関わり方を考えようとしている。
4. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由】 世界にはさまざまな課題があり、それに対して多くの支援が行われているが、児童にとっては遠い国の出来事として感じられることが多い。そこで、JICA 海外協力隊員の活動を教材として取り上げ、さらに身近な生活とつなげて考えることで、支援を身近に感じられるようにした。「今すぐできる支援」と「未来につながる支援」という視点で考えることで、児童が自分の生活と結び付けながら支援について考えられると考え、本単元を設定した。 【本単元の意義】 本単元では、協力隊員の活動を通して、支援には目の前の困りごとを助ける関わりだけでなく、その先の生活や将来につながっていく関わりがあることを扱う。世界で行われている支援を、学級や学校生活の場面と重ねて考えることで、児童は「助ける」とは何かを自分なりに考え、相手の立場に立った関わり方について考え	

を深めていく。また、学んだことを日常の行動と結び付けて捉えようとする点に、本単元の意義がある。

【児童／生徒観】

本学級の児童は、困っている人を見ると「助けない」「何かしてあげたい」という気持ちを素直にもっていた。一方で、「助ける」ことを、その場ですぐにできる行動として捉えることが多く、その先のことまで考える機会はあまり多くなかった。

しかし、話し合いやワークシートを通して自分の考えを出したり、友だちの意見を聞いたりすることには前向きに取り組み、自分の経験と結び付けながら考えを広げる姿が見られた。そのため、支援の形を比べて考える活動を通して、相手にとって本当に力になる関わり方には、「今」だけでなく「これから（未来）」という視点も大切であることを、児童なりに考えを深めることができた。

【指導観】

指導にあたっては、協力隊員の具体的な活動をもとに、児童が「支援」について自分の言葉で考えられるよう、クイズや話し合い活動を取り入れた。クイズの場面では、全体で黒板を使いながら意見を出し合い、児童の素直な考えを共有した。はじめから「今すぐできる支援」「未来につながる支援」という分類を示すのではなく、出された意見をもとに考えを深めていく中で、児童自身の言葉としてこれらの表現が生まれるようにした。

その後、ロイロノートを活用し、班の話し合いの中で「今すぐできる支援」「未来につながる支援」「どちらにもあてはまる支援」を表に整理する活動を行った。また、学校生活の中にある身近な場面を取り上げることで、学んだことを自分の生活と結び付けて考えられるようにした。全体での共有や意見交流を通して、相手の立場に立ちながら、「相手にとって本当に力になる関わり方とは何か」を考える姿が見られた。

5. 単元計画（全 2 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1		世界にはさまざまな課題があり、それぞれに「支援」が必要であることに気づき、JICA 海外協力隊の活動を通して世界とのつながりを考える。	1. フォトランゲージを通して、世界のさまざまな場面や課題の様子を見て感じたことを交流する。 2. 写真から、世界にはどんな困りごとや課題があるかを話し合い、気づきを共有する。 3. 「JICA」や「JICA 海外協力隊」で多くの日本人が支援のために海外にいることを知る。	写真 ワークシート
2 本時		協力隊員の活動を通して「今すぐできる支援」と「未来につながる支援」の違い	1. 協力隊員の活動をクイズで知り、支援の多様な形に気づく。 2. ワークシートで「今すぐできる支援」「未来につながる支援」に整理する。	写真 ロイロノート

		に気づき、自分の生活の中での支援のあり方を考える。	3.自分たちの身の回りでも「今支援する」と「未来のために支援したほうがいい」ことがないか考える。 4.気づいたことを共有し、支援のあり方について考えを深める。	
6. 本時の展開（ 2 時間目） 本時のねらい：前時に、世界にはさまざまな課題があり、それぞれに支援が必要であることを学んだ子どもたちが、協力隊員の活動を知り、「今すぐできる支援」と「未来につながる支援」、「どちらにもあてはまる支援」に分ける活動を通して、支援の違いに気づき、自分の生活でも相手にとって本当に力になる関わり方は何かと考えようとする態度を育てる。				
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態 【子どもの反応】		指導上の留意点 （支援） 評価	
導入 （5分）	1 前時にふりかえり 前時に扱ったタンザニアの医療現場の写真を再度提示し、前回の考えを振り返る。  【この協力隊の人は一人でも多く助けたいと思って活動していると思う】 【日本のやり方(技術)を教えてあげるために行っていると思う】 【学習課題】「助ける」ってどんなこと？		・ 前時の学び（医療現場の現状や協力隊の存在）を想起させる発問を行う。	
展開① （15分）	2. クイズ 『この現場に“今”必要な「助け」は何でしょう?』というクイズを出す。 【「薬」「お金」「医者」「医療機器」など、目の前の課題を解決する答え。】【「建物」「教育」「技術」など、少し先を見た答えも出始める。】  3.現地の課題や求められる「助け」について考える。 助けるには「今」と「これから」があることを確認する。 【薬とかお金があればすぐ助けられるよね。】 【でも、使える人がいないとダメなんだ。】 【「今すぐ助けることも大切」「どっちも必要」といった意見も出る。】		子どもの発言を受け止め、「まだ他にも考えられるかな?」と問い返し、次の学習(支援の在り方の違い)への関心を高める。 ・ 協力隊員の発言を示し、子どもが「教育＝これからにつながる助け」と捉えられるように支援する。 ・ 「助ける」には「今」と「これから」があることを具体例で示しながら確認し、両方の支援が大事であること	

展開②

(15分)

4.相手の立場に立ち、「今すぐできる支援」や「未来につながる支援」が身近にないか考える。

【友だちに教えてあげるのは今の支援かな。】

【勉強のやり方を教えるのは未来のため？】

【やり方が分かるまで一緒にとくのが未来のためになるんじゃない？】

【掃除を手伝うのも今すぐできること、みんなで決めるルールを作るのは未来につながるかも。】

「例えば、 (表書き、掃除、 勉強、授業、交流 など)」	いろんな「たすける」を考えよう。		
	今の「たすける」	どっちにも当てはまる orどっちかわからない	これからの「たすける」
例) 三角形の面積の求め方がわからなくて困っている。	公式教える	なし	覚えるまで一緒にとく
ゆいとうまつりでの年生が自分のペアがわからなくなっている。	「名前を覚えていれば」その人はこんな人だよといっしょに探す。	なし	ペアと一緒に手をつないでほぐれないようにする。
委員会で自分の席の場所がわからなくなっている。	「委員会の委員長の名前を知っていたら」その人がいる学年へ行って、その人にやり方を聞く。	なし	その数えてもらった人に教えてもらったそのことをメモする。

に気づかせる。

- ・学校生活や家庭生活の具体例（掃除、勉強、遊び、片付けなど）を提示し、考えやすくする。
- ・個人で考えた後、グループで話す時間を取り、複数の視点に触れられるようにする。

- ・子どもの言葉を受け止めながら、支援には「今」と「未来」の両方の視点があることを押さえる。

- ・協力隊の人たちの活動も「今だけでなく未来につながる助ける活動」であることを確認する。

話し合いやワークシートから、相手にとって本当に力になるかわかり方を考えているか。

まとめ

(5分)

5.本当に相手のためになる「助ける」について考えたことをまとめる。

【「今」助けることも大事だけど、「これから」につながる助けるも大事だと思った。】

【今とこれから、両方を考えて行動したい。】

【学校生活で友だちとかかわるときにも、これからにつながる助けについて考えて行動したい。】

6.友だちと考えを共有する。

7. 資料（教材）

第一時 フォトランゲージで使用した写真



8. 評価規準に基づく本時の評価方法

話し合いやワークシートから、相手にとって本当に力になるかわかり方を考えているか。（思考・判断・表現）

9. 学校外との連携 ※JICA 以外。なければ不要。 特になし		
10. 学びの軌跡（児童生徒の反応・変容、感想文、作文、ノートなど） 本時の振り返り（抜粋）		
本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。 助けるときにも時と場合があって、その時に必要なものや、やることが違うと考えた。 助けるためには、ものだけじゃなく、教え合うことなどが大切だと思った。	本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。 前は、今助かったりすることしか考えていなかったけど、今は今だけじゃなくて、未来までのことを考えられた。 相手のことを考えるためには、今だけのことを考えるのではなくて、未来のことまで考えるといいなと思った。	本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。 「助ける」には、「今助けるためにはどうするか」だけではなく「そのためにこれからどんなことをしたらいいか」という「未来の助ける」というのも考えるのが大切だと思った。
本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。 助けるにはいろんな助けるがあって、今を助けるときと、これから助けるがあった。 今を助けるは、いつか無くなるものや、今だけ覚えられるものがあるけど、これから助けるには、いろんな技術や、これからも覚えていられるようなこと。今助けるのは、もちろん大事だけど、これから助けることも、とても大事。今までの考えは助けられればいいと思っていただけ今は、これからのことも助けたほうがいいと思った。	本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。 『助ける』には「今」と「未来」の『助ける』があって、「今」助けるのも大事だけど「未来」も助けることが大事なんだなと思った。 私は「今」のことばかり考えていたけど、「未来」・「これから」を考えることも大切なんだなと思った。	本当に相手のためになる「助ける」について授業で考えたこと、わかったことを書きましょう。 「助ける」には、「今助けるかどうするか」より、助けるために、「どうすればいいか」とか、助けたとして、「その人のためになるか」とかを考えたほうが良いと思う。 私が助けるときには、「今」の助けるのことしか考えていなくて、「未来」の助けるがあることも、それが大事だということも、知らなかった。

【本時または単元について、個人で振り返ったことを記載】

11. 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか	私が教師海外研修で様々な価値観に出会い、多くの経験をする中で、最も心に残っている言葉が、看護師協力隊員の方が語っていた「教育はすべての源である」という言葉である。研修中、私たち研修員が「もし、日本から物資や薬、機械など、何でも持ってくることでできるとしたら、何が一番必要か」と質問したところ、「教育である。どれほど高価な機械があっても、管理できる人や使い方が分かる人がいなければ意味がない。まずは人を育てる教育が必要である」と答えてくださった。さらに、「先生方はとても素晴らしい仕事をしている。これからはがんばってほしい」と言葉をかけていただき、この言葉を通して、教育の意味を改めて自らに問い返すきっかけとなった。 授業づくりを進めるにあたり、教師海外研修では多くの学びがあったため、どの経験を教材化するか、また、どのように児童の学びへとつなげるかについて大いに悩んだ。そこで、研修の中でも特に自分の心に強く残っているこの出来事を授業の題材として扱うことにした。しかし、「教育」という言葉は、小学校5年生の児童にとっては抽象的であり、自分事として捉えることが難しいと感じた。そこで本時では、「教育」という言葉をそのまま扱うのではなく、「今の支援」と「これからの支援」という表現に置き換え、児童が自分の生活と結び付けながら考えられるように授業を構成した。
12. 苦労した点	本実践では、教材を0から作り上げることに、思っていた以上に時間がかかった。タンザニアでの経験の中でも、協力隊のお話を授業で扱いたいと考え、言葉を教材にしようと決めてからも、それをどのように子どもたちの学びにつ

	なげるか、何度も考え直した。 「支援」や「教育」といった言葉は、子どもたちには少し難しく感じられるため、そのまま伝えるのではなく、生活に引きつけて考えられるよう、問いの出し方や授業の流れを工夫した。 また、「助けるとは何か」という問いにははっきりとした答えがなく、私自身も迷いながら子どもたちと一緒に考える時間となり、授業の進め方の難しさを感じた。
13. 改善点	今回の授業では、子どもたちの考えを大切にしたいと思いながらも、結果的に教師側の意図に寄せた、やや誘導的な進め方になってしまったと感じている。子どもの発言に対して、問い返して考えを深める場面よりも、先に次の問いを示してしまうことがあった。また、「今すぐできる支援」や「未来につながる支援」という考えについても、子どもたちの言葉から自然に生まれるような関わりを、十分に行うことができなかった。 今後は、考えをまとめることを急ぐのではなく、子どもたちの迷いや立ち止まる時間を大切にしながら、子ども自身の言葉を起点とした授業づくりを心がけていきたい。
14. 成果が出た点	協力隊員の活動を通して、「助ける」とはどのような関わりなのかを、子どもたちが自分なりに考え、話し合う姿が見られた。授業の中で、目の前の困りごとを助けるだけでなく、その先につながる関わり方があることに気づいていった。 また、「今すぐできる支援」「未来につながる支援」という言葉を子どもたちの発言から整理して共有したことで、学校生活や友だちとの関わりに話題をつなげ、身近な場面で考えようとする姿が見られた。
15. 自由記述	今回の授業実践は、教師海外研修での経験をもとに、「自分の経験から授業を生み出す」という、私にとって大きな挑戦であった。現地で感じたことや心に残った言葉を、どのように子どもたちの学びにつなげていくのか悩みながら授業づくりを進めてきたが、その過程そのものが、自分にとって大切な学びの時間となった。 このような経験ができたのは、教師海外研修の機会を与えてくださった JICA の皆様をはじめ、現地で出会った協力隊員の方々、研修に関わってくださった多くの方々の支えがあったからこそである。また、日頃から相談に乗ってくださった先生方や、授業をともにつくってくれた子どもたちの存在も大きく、多くの人のつながりの中でこの実践が形になったことに感謝している。 今回の学びをこの授業だけで終わらせるのではなく、今後も自分自身の経験や学びを大切にしながら、子どもたちや地域の人たちと共有し、次の学びへとつなげていきたい。タンザニアでの経験から始まった学びを、これからも「つながりをつなぐ」授業づくりへと生かしていきたい。

参考資料・使用教科書：なし